様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２２３９

研究課題名（和文）方法としての有島武郎－1920年代の朝鮮文壇における女性・子供・労働者の表象

研究課題名（英文）Arishima Takeo as a method: The representation of women, children, workers in the Korean literary era of the 1920s

研究代表者
丁　貴連（Jeong, Gwiryun）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：８０３１２８５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、「最も西欧的な知性の作家」と言われる有島武郎が、1910年代から20年代にかけて朝鮮は無論、魯迅をはじめとする中国の近代文学者の間でも広くかつ深く受容されていた背景を明らかにした。しかも、彼らはただ単に有島の作品を愛読していただけではなく、社会的弱者である女性や子供、労働者をめぐって有島と問題意識を共有していたことを浮き彫りにした。
　とりわけ、本研究では子供問題を扱った「小さき者へ」（1918）が朝鮮語と中国語に翻訳されていた背後に、近代化を渇望する東アジア知識人の危機意識が深くかかわっていたことを指摘することによって、「アジアの欠落」が指摘される有島文学に新たな視点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　まず、「アジアの欠落」が指摘される有島文学を、有島の愛読者であった東アジアの近代文学者から逆照射することによって、欧米文学重視の有島研究に新たな視点をもらたした。次に、「最も西欧的な知性の作家」と言われる有島が、魯迅や金東仁、廉想渉といった東アジアの近代文学者たちに深く受容された背景に、アメリカ留学中に接近した社会主義とアナキズム、フェミニズム、ホイットマンが深くかかわっていたことを指摘できた。そして、有島の文学と思想に深い影響を与えた社会主義をはじめとする欧米思想が1910年代から30年代にかけて朝鮮や中国、台湾にどのように移動・変容していったのか、その実態をも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the first year of the researach, I worked on elucidating the background of the works of Arishima being widely read among foreign students who came from China or Korea from the 1910s to the 20s. As a result, it has been found that the “western charactrer”in Arishima literature is the cause of being read by readers of East Asia including Lu Xun. In the second year of the research, I investigaed America, which had a great influuence on his litereature and thought, in order to approach the essence of Arishima literature.In the third year of the research, I analyzed data collected for twe years.As a result, it was revealed that the crisis awareness of East Asian intellectuals was deeply realted to the Arishima Takeo boom that happened in Korea and China in the 1920s.In the final year of the research, it was revealed that Arishima's“To small people”is not only accepted by intellectuals in East Asian such as Lu Xun, but also influenced the child liberation movement in Korea and China

研究分野：比較文学

キーワード：有島武郎　金東仁　魯迅　子供優先思想　アメリカ体験　アジアからのまなざし　「小さき者へ」　翻訳

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

私は、修士論文（1991 年度）以来、韓国近代文学の起源に深くかかわる日本近代文学者の中でもとりわけ国木田独歩に注目し、彼が韓国近代文学に及ぼした影響関係の究明に取り組んできた。その成果は、2014 年 2 月に上梓した単著『媒介者としての国木田独歩－ヨーロッパから日本、そして朝鮮へ』（翰林書房、484 頁、2013 年度科学研究費補助金出版助成）として結実されている。これにより、もっぱら西洋を見つめ、西欧文学の一方的な受信者と知られる日本の近代文学が、韓国近代文学に及ぼしていた影響関係の実態がより明確になってきた。中でも独歩は、ワーズワースやツルゲーネフ、モーパッサンから新しい自然美と人生観、そして告白録をはじめとする新たな短編スタイルを獲得して自然主義文学の先駆となり得ただけではなく、韓国文学の近代化にも先駆的な役割を果たしていたことを浮き彫りにした。

ところが、研究を進めていくにつれて新たな事実が浮上してきた。それは、独歩以上に有島武郎も韓国の近代文学の成立に深い影響を及ぼしていたことである。韓国だけではない。魯迅をはじめとする中国の近代文学者たちも有島の作品を耽読し、その影響を強く受けている。2010 年度から取り組んだ「有島武郎と外国文学―韓国近代文学を手掛かりとして」（2010 年度－2012 年度科学研究費補助金：基盤研究Ｃ）では、「アジアの欠落」が指摘される有島の作品が韓国の近代文学者たちに受容された背景と特徴、韓国文学にもたらした意味を明らかにし、韓国近代文学に与えた日本近代文学の影響が独歩の短編形式から有島の内面描写へと受け継がれていたことを浮き彫りにした。

しかし残念ながら、これらの研究では韓国における有島武郎の受容とその影響を解明するにとどまり、アジアへの関心が欠けていた有島の作品が韓国や中国、台湾など東アジアの近代文学者の間で広く読まれていた背景に迫ることができなかった。

２．研究の目的

そこで本研究では、1920 年代の朝鮮文壇で巻き起こった有島武郎ブームを、同時期の中国文壇で起こった有島武郎ブームと比較考察し、「アジアの欠落」が指摘される有島が、魯迅をはじめとする東アジアの近代文学者たちに受容された背景を明らかにすることによって、韓国と中国で巻き起こった有島ブームの背後に近代化を渇望する東アジア知識人の危機意識が据えられていたという新しい視点を指摘し、欧米文学重視の有島研究に修正を迫ることにした。

３．研究の方法

その目的を明らかにするために、本研究では次の 2 つの方法法を用いて分析を行なった。

（１）有島の作品が、1900 年代から 20 年代にかけて朝鮮や中国から来日した留学生たちと留学帰りの知識人の間で広くかつ深く読まれていた背景の解明に取り組んだ。その結果、有島文学における西欧的性格こそが、魯迅をはじめとする東アジアの読者に受容される契機となっていることを浮き彫りにすることができた。

（２）有島文学における西欧的性格に迫るために、アメリカ留学時代の有島の足跡をフィールド・ワークし、「アジアの欠落」が指摘される有島が東アジアの近代文学者たちに深く受容されていただけではなく、彼らと女性や子供、労働者を巡って問題意識を共有していた背景に、アメリカ留学中に出会った社会主義者の金子喜一とその妻ジョセフィン・コンガーから学んだ社会主義とフェミニズム、アナキズムが深く関わっていたことを浮き彫りにした。

４．研究成果

（１）アジアからの眼差し

「アジアの欠落」が指摘されている有島と違い、アジアの方は有島に関心を示していた例は

少なくない。その代表と知られる魯迅は生涯にわたって有島の作品を愛読していただけではなく、その感動を中国の読者と共有するために翻訳まで行なっていたが、有島の作品に共鳴を覚えていたのは魯迅だけではない。1910 年代から 20 年代にかけて朝鮮から来日していた留学生たちも有島の作品に深い共感を覚え、その感動を自国の読者に伝えるために翻訳を行なっていた。その結果、有島の生前中に小説４編、すなわち「お末の死」（1914）「朝霧」（1916）「死とその前後」（1917）「小さき者へ」（1918）とエッセイ１編「四つの事」（1917）の計５編が中国語と朝鮮語で翻訳発表されている。有島自身はそのことを全く知らずに、1923 年 6 月 9 日、軽井沢の別荘で婦人記者波多野秋子と心中を遂げたが、生前の彼は自身の作品を「英語に翻訳し、ヨーロッパの人々の間にも読者を見出したいと願っています。この希望をいつの日か実現させるつもりです」（マティルデ・ヘック宛書簡、1919 年 1 月 15 日付）と、外国人の読者を作りたいと意欲を示していた。しかし、彼の希望とは裏腹に、有島の作品が英語圏をはじめとする欧米諸国の読書界に翻訳されるようになったのは死後のことである。

ところが、魯迅をはじめとするアジアの読者は、生前は無論、死後もなお有島の作品を愛読し、精力的に翻訳活動を行なっていた。翻訳だけではない。金東仁は「死とその前後」を翻訳する一年前に、自身の小説「心浅き者よ」（1919）の中で韓国近代文学史上初めて有島の作品に言及し、寸評をも行なっている。その反響は大きく、以後田榮澤をはじめ妙香仙人、廉想渉、朴鐘和、黄錫禹といった留学帰りの文学者やジャーナリスト、思想家たちは次々と有島を取り上げた。その結果、情死を遂げた 1923 年頃の有島は、「朝鮮の青年達の間でも多くの敬愛を受けていた」（『東亜日報』1923 年 7 月 10 日付）日本人文学者の一人であった。有島の死は当時の朝鮮知識人社会に大きな波紋をもたらしたが、実は中国の知識人たちにも大きな衝撃を与えていた。魯迅に「小さき者へ」の一読を勧めていた周作人は、『晨報副鐫』（1923 年 7 月 17 日）に追悼文を寄稿し、有島の「死を侮蔑してはならない」と訴えていたが、有島の死に際して韓国と中国のメディアが示した反応ぶりは、当時の東アジアで彼の認知度が如何に高かったかを雄弁に物語っている。

このように、アジアの方は有島に対して積極的に関心を向けていたが、魯迅をはじめとするアジアの人たちを有島の文学と思想に導いた作品は、実は中国と韓国両国で翻訳紹介されていた「小さき者へ」（1918）なのである。

（２）東アジア知識人の危機意識と「小さき者へ」受容

「小さき者へ」は、金東仁が 1920 年に韓国語に訳した「死とその前後」（1917）と共に武郎の私生活に取材したいわゆる私小説風の作品である。ほかにも「An Incident」（1914）、「平凡人の手紙」（1917）、「小さな影」（1919）、「親子」（1923）などがこの系統に属する作品であるが、中でも「小さき者へ」は「一行のうそも書き加えられていない」と言われているように、病気で母を亡くした三人の幼い子供たちへあてた武郎の手記ともいえる小品である。にもかかわらず、この作品が東アジアの知識人たちに深い感銘を与えつづけていたのはなぜか。本研究では、その背景を魯迅と李光洙、そして朴錫胤から迫った。紙面の都合上、ここでは魯迅と李光洙の場合を紹介する。

①魯迅の場合－なぜ魯迅は「小さき者へ」を訳したのか

魯迅が「小さき者へ」を読みだした 1919 年頃は、『或る女』（1919）をはじめ『カインの末裔』（1918）『生まれ出づる悩み』（1917）『迷路』（1916）『宣言』（1915）など、有島の代表作が出そろった時期である。しかし、魯迅はそれらの代表作にはほとんど関心を示さなかった。なぜ小説ではなく、子供をテーマとした小品や文芸批評を訳していたのか。その翻訳意図を知るうえで、周作人の「武者小路さんの『或る青年の夢』を読む」（『新青年』

1918年5月）に刺激されて『或る青年の夢』を翻訳した魯迅が、翻訳に至る経緯を述べた「訳者序とその二」（『新青年』1920年1月）は示唆に富む。これによれば、魯迅はこの作品を翻訳しようと思いだったのは、単に反戦論を訴えた武者小路の主張に共感したというだけではなく、「この戯曲が多くの中国旧思想の宿阿を治癒」することができると思ったから翻訳を行なっていたと述べている。

この文章に注目していた山田敬三は、魯迅が武者小路の『或る青年の夢』を「中国に扶植しようとした最大の意図は、それが日本人の「獣性」をついた同じ刃で、彼の愛する中国民衆の膿を切開してくれると判断したことである」と指摘し、このような視点は同じく『或る青年の夢』に感銘を受けていた弟の周作人にはまったく欠落していた「魯迅固有のもの」であると主張している。

確かに、周作人と魯迅は文学によって中国の民衆を覚醒させようと努力してきた間柄である。しかし、周作人と違い、魯迅は自国民の「宿阿」、すなわち悪しき疾患を指摘する作品に共鳴し、それらを積極的に翻訳紹介していたのである。なかでも武郎の作品は、中国古来の家族制度にどっぷり浸かっていた中国人の精神改造を図ろうとしていた魯迅の問題意識と共有するところが多く、その影響は翻訳リストが雄弁に物語っている。何よりも最初に訳した作品が「子供崇拝の思想」を訴える「小さき者へ」であったという事実に魯迅の危機意識を指摘せずにはいられない。

かつての中国社会では、目上の人、年長の者への絶対的な服従と礼儀こそが徳目とされ、子供の存在を強調することは長らくタブーであった。こうした考えは近代に入ってからも衰えることなく、むしろ子供を巡る環境は悪化していくばかりであった。そんな状態に危機感を抱いた知識人たちが、1915年に『新青年』を創刊し、儒教道徳と家族制度から子供を解放せよと呼びかけた。その一人魯迅は、人が「人を食う」大家族制度の秩序と儒教道徳のなかに生きる「子どもを救え」と叫んだ『狂人日記』を発表し、中国社会を震撼させたことはあまりにも有名な話である。それほど当時の中国知識人にとって子供問題は早急に解決せねばならない悪しき疾患の一つであったが、その「疾患」を治癒する「処方箋」の一つとして、魯迅は武郎の「小さき者へ」を中国に翻訳紹介したのである。このようなまなざしは、韓国近代文学の父と言われる李光洙との間にも見られる。

②李光洙の場合－「子女中心論」（1918年9月）の源泉としての「小さき者へ」

李光洙は、魯迅と同じく儒教が朝鮮社会の近代化を妨げる元凶だと考え、1910年半ば頃から儒教批判を展開し、儒教的価値観にどっぷり漬かっていた朝鮮社会に対して変革を促した。中でも、第二次（1915年9月～1918年10月）留学中の1918年9月に発表された「子女中心論」では、「旧朝鮮の誤った道徳から新朝鮮の子女を救出する」ためには、「我々は（中略）必要ならば祖先の墳墓も暴き、父母の血肉も我々の食糧とせねばならぬ」と過激な主張をし、儒学者たちの強い反発を受けていたことはよく知られた事実である。

これまで「子女中心論」をめぐっては、儒教の呪縛から子供を解き放つというテーマから魯迅の『狂人日記』（『新青年』1918年5月）とよく比較されてきたが、それ以上に共通の認識が見受けられるのは、「我々はいまいかにして父親となるか」（『新青年』1919年11月）である。

当時、魯迅は儒教の「孝」による服従の論理こそ中国の進歩を妨げている要因に他ならないと考え、小説『狂人日記』と評論「我々はいまいかにして父親となるか」などを通して、儒教のヒエラルキーから子供を解放せよと主張し、中国文壇を震撼させていた。まさにその時、周作人の勧めで「小さき者へ」（『新潮』1918年1月）を読んだ魯迅は、その内

容に驚愕した。なぜなら、「小さき者へ」の中で述べられていた有島の主張が、二日前に書いた「我々はいまいかにして父親となるか」で述べた自分の主張と多くの点で共通していたからである。魯迅が共感した有島の主張はほかでもない、「お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗越えて進まなければ間違つてゐるのだ」という子供優先の「思想」なのである。

ところが、「親が子の踏台になる」というこの新しい考えは李光洙の「子女中心論」の中でも主張されていた。その箇所を「小さき者へ」と見比べてみると、李光洙は魯迅以上に有島武郎の影響を強く受けていたことが分かる。ただし魯迅と違い、李光洙は「小さき者へ」をはじめとする有島の作品に関しては一切の記録を残していない。それ故に両者の影響関係を軽々しく指摘するわけにはいかないが、「子女中心論」が執筆された時期と環境を考慮すると、李光洙が「小さき者へ」から多くのヒントを得ていたことは間違いあるまい。1918 年当時、李光洙は早稲田大学の留学生として、学業のかたわら朝鮮社会の改革を促す執筆活動を積極的に行なっていた。その際彼は、自分の考えや主張と一致するものを日本文学や日本語に訳された外国の作品を探し出して耽読し、それらと問題意識を共有しながら、自分の考えを深めていた。

（3）「小さき者へ」をめぐる東アジア知識人の思想的連帯

その詳細は拙稿と拙著を参照されたいが、これまで見てきたように、李光洙は儒教の呪縛から女と子供を解放する必要性を訴え続けてきた文学者である。その彼が、再デビューを果たしてから僅か一年で文壇の寵児に上り詰めた有島が、自分と同様の主張をした作品を執筆し、それが文壇の注目を集めていることに無関心ではいられなかったであろう。菊池寛は発表されたばかりの有島の「小さき者へ」を、「親を子供の爲に踏台にしようと云ふ子供崇拝の思想」を書き表した作品であると高く評価し、この「子供崇拝の思想」は「今の日本に必要な物の一つである」と付け加えている。

李光洙が、この批評を読んでいたかどうかは定かではない。しかし、「子供崇拝の思想」、言い換えれば「子供中心」の思想は、李光洙が求めてやまなかった思想に他ならない。その実現のために執筆活動をしてきた李光洙は、自分の主張とあまりにも近いことが述べられている「小さき者へ」に衝撃を隠せなかったであろう。しかしそれよりも増して嬉しかったのは自分と同じことを考えていた同伴者を見つけたことに深い感動を覚えていたのではないだろうか。同様の思いは魯迅に対しても言えよう。

李光洙は魯迅との間では生涯面識はなく、無論、魯迅も彼のことは知らなかった。確かなのは、二人がまるで申し合わせたかのように、儒教のヒエラルキーから女と子供を解放すべきだと主張していたことだ。しかも、その関心から有島の作品に出合い、自分たちと問題意識を共有していた強力な知己を得たことによって、自らの思想を深化させることができたことはもっと注目されてしかるべき事実だと思うのである。

＜引用文献＞

①『有島武郎全集』、筑摩書房、1980～1988
②有島武郎研究会編、『有島武郎事典』、勉誠出版、2010
③『李光洙全集』、三中堂（韓国語）、1971
④伊藤虎丸、『魯迅と日本人－アジアの近代と「個」の思想』、朝日新聞社、1983
⑤丁貴連、『媒介者としての国木田独歩－ヨーロッパから日本、そして朝鮮へ』、翰林書房、2014
⑥丁貴連「啓蒙と文学の間で－韓国近代文学における子ども」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第 9 号、宇都宮大学国際学部』2000 年 3 月
⑦『魯迅全集』、学習研究社、1984～1986
⑧山田敬三、『魯迅の世界』、大修館、1976

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）
①丁貴連、方法としての有島武郎（２）―「小さき者へ」をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯、宇都宮大学国際学部付属多文化公共圏センター年報、査読無、第 11 号、2018、39-50
②丁貴連、方法としての有島武郎―「小さき者へ」をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯、宇都宮大学国際学部付属多文化公共圏センター年報、査読無、第 10 号、2017、86 - 97
③丁貴連、有島武郎と朝鮮メディア－情死事件をてがかりとして、宇都宮大学国際学部付属多文化公共圏センター年報、査読無、第 8 号、2015、43 - 61

〔学会発表〕（計 2 件）
①Gwiryun, Jeong. (2016) “ Kunikid Doppo as "the Origin" of Korean Modern Literature: Focusing on Arishima Takeo ” Fall 2016 Columbia University, Sponsored by Professor Tomi Suzuki “ Graduate Seminar in Modern Literature”, Key Lecture, October 20, 2016
②Gwiryun, Jeong.(2016) “ The Reception of Japanese Literature in Modern Korea: The Influence of Kunikida Doppo and Arishima ”(5-6:30 pm Wednesday, December 14, 2016.403 Kent Hall, Columbia University) Sponsored by the Department of East Asian Languages and Cultures and the Donald Keene Center of Japanese Culture

〔図書〕（計　　件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：
○取得状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等
６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：
(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。